

石狩川で最大の難所が、このカムイコタンである。丸木舟の操舟の名手のアイヌの人たちも、掲載図（現行五万分一図を八十五%縮小）のシキウシバからハルシナイの約二キロ流となり、丸木舟での上下が不可能であった。アイヌの人たちは、この間をカムイ・コタン(kamuy-kotan)と云ふ。今、神居村と称す。」

掲載図の★印のテシ(tes 石梁)に關して、鬼神(ニツネカムイ)を神サマイクルが退治する伝説を紹介している。

知里真志保は、昭和三十五年に、「上川郡アイヌ語地名解」でカムイコタンの地名解を次のように書いた。

「カムイ・コタン(kamui-kotan)と云ふ。今、神居村と称す。」

掲載図の★印のテシ(tes 石梁)に關して、鬼神(ニツネカムイ)を神サマイクルが退治する伝説を紹介している。

既に、昭和三十一年刊行の『アイヌ語入門』でも同趣意の見解

を発表していて、かつ、右の地名解を発表していて、かつ、右の地名解は、『旭川市史第四巻』に掲載されたもので、以後は、旭川では、知里真志保の「カムイコタン＝魔の里」説でも同趣意の見解

を発表して、かく、右の地名解は、『旭川市史第四巻』に掲載されたもので、以後は、旭川では、知里真志保の「カムイコタン＝魔の里」説でも同趣意の見解

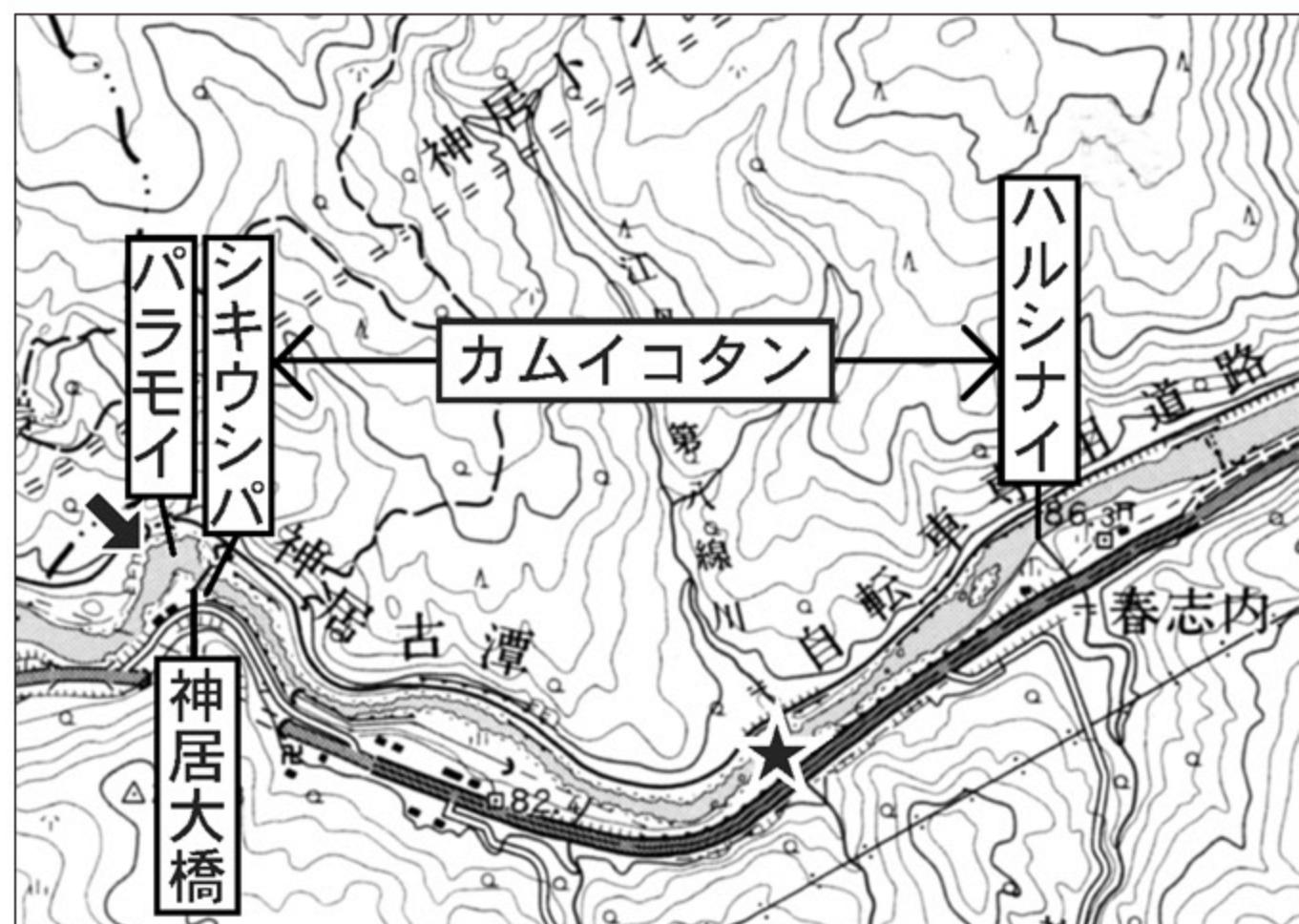
が流布し、一般的な見解となつた。

実は、カムイコタンは、ここ石狩川だけでなく、天塩川・空知川・夕張川・雨竜川・歴舟川にもあり、いずれも舟行の難所であった。アイヌ語地名研究家の山田秀三は、右の知里真志保の調査にも同行し、掲載写真も提供していた。その上で、他の河川のカムイコタンも調査した。その結果を、昭和五十九年に、『北海道の地名』の中で発表し、旭川のカムイコタンについては、次のように述べた。

断章 旭川のアイヌ語 地名研究

(44)

高橋 基



—旭川のカムイコタン①—



志保は、既に、昭和三十一年刊行の『アイヌ語入門』でも同趣意の見解

神の・居所)－アイヌ時代の神様は激流とか断崖のような人間の近寄りにくい處に、好んでいらつしゃった。人間はそこを通る時は恐れ畏こんで過ぎなければならぬ。不謹慎者はお咎を受けるのは当然な場所なのである(「神がいらっしゃる所」の意)。

筆者も先にあげた各河川のカムイコタンを実際に調査して、山田秀三の解説が妥当なものと実感している。さて、写真のパラモイは、カムイコタンの入口で、丸木舟で石狩川を遡る人たちには、前号の神納橋からカムイウッカ(kamuy-utka 神・瀬)の白波立つ激流を乗り越えて、やつとパラモイに着いて、安堵する所であつた。写真は→印の位置から撮影したもので、正にパラ・モイ(paral moy 広い・湾)の景観である。カムイコタンの峡谷を流れてきた激流が、中央に見える神居大橋から川幅が急に広くなり、湾のように見える流れになつた所を名付けたものである。ここから多くの伝説の岩などがあり、次回からこれらを紹介したい。(アイヌ語地名研究会幹事)